

計屋家系図について

永田は江戸時代、屋久島で一番経済力があり、島の石高の半分を越す農林産物の産出があった。薩摩の藩倉を有し、河口港は発達し、内外の貿易も栄えていた村であったと聞くと、幕末の計屋家はその永田を本拠地として手広く海運業を営み、藩御用を勤め、鯉船を所有し、鯉・鯖節の加工販売、木材取引など一大政商の家系であった。掲載の『計屋家系図』は屋久島で初に拝見した系図である。

系図は、近世十代に亘るもので、大人物にかかわる由緒を記すものではないが、屋久島の歴史を語っている条もあり、当主計屋謙吉氏のお許を得て紹介するものである。

歴史的な点といえば、一つが、即ち天保六年大流行した疱瘡によって消滅した脇元村（永田と半山の間に位置した）のことを記し、一つは浄土真宗の屋久島導入の時期や、導入者を書きあらためる史実が隠されているやに思えること、尚また海

運取扱品に藩庁の許可外をも積載された可能性をも読みとれ、史実を知る興味ある資料である。

余談になるが、島内集落の成立を調べるに、ま、神社の由緒書にそれを知る記載を見るが、島民の生活史や系図等所有する家は少い。来歴を聞けば、多く平家の落武者と云う答えが返ってくるが、すべてを真とするには今一つ裏付けが無い。

屋久島の歴史は遠くにはじまる。一湊遺跡が物語るように縄文前期の土器が、南島と北方の接点で両者を合せ出土するのは、考古学的に高い評価を受けていることは措くとして、日本書紀に南島で最初に記載（六一六）される屋久島の変遷、社会発展の過程は、まだまだ奥が深いと云えるし、これからも山岳信仰面や、超高齢の屋久杉に教えを乞う必要が大きかろう。合せて計屋家の系図と対をなす『覚書』の類の所在をも確認することを忘れてはならない。

屋久島の島内に少ない家譜・覚書の類、種子島家の領有から、島津氏の直轄地に移行する慶長年

代、島民所有の刀剣・銃砲や記録類に至るまで没収されたという口碑の事実、藩財政強化のための屋久杉の平木加工の奨励・増産策は、島民から学問の道を閉ざす結果になったというが、島民に文学文化の消えた所以なのか、資料発掘ののぞまれるところである。

そこで、元々屋久島に系図類が無かったかというに、それは当たらない。島津の屋久島支配に伴い、種子島家から派遣されていた地頭・代官等は漸次引上げるが、それらの系図に屋久島の居住時代が記録されていること、血縁者に残留組もあつたろうことを考えれば、系図は書写されて屋久島にも残ったことは想像にかたくない。が、現在計屋家に見られる以外、他に系図を知らないのは不思議である。天災もあろうが、どうも焚書の匂いがないでもない。

ともあれ、屋久島で唯一（？）計屋家の系図に接することが出来ることは幸いで、本誌掲載に快く応じられた計屋謙吉氏に、深く感謝する次第である。

文献資料
紹介

第29回

【計屋家系図】

山本秀雄

(やまもとひでお)

計屋家系図

初代

○計屋休兵衛

享保十七年壬子十二月三日

法名 蓮信院道林信士

當文久二壬戌年迄百三十一歳に成る。

右新町、計屋源兵衛方より移り来る。

今の周五郎先祖也。

妻 宝曆八年寅八月二十九日

法名 蓮正院妙軌信女

當壬戌歳迄百五歳になる。

右者、川崎惣左エ門方より来る。今の三四良先祖也。

嫡男 周助

二男 順右衛門 別立當分計屋休兵衛

并に亦者休吉方に別立

右順右衛門どなの前に別立其の嫡子休兵衛

又其の子休藏伴休兵衛にて二男清藏にして

今町へ親子同居直り其の養子順四郎其の子

休太郎也。

二代

○計屋周助

宝曆四年甲申正月六日

法名 堯善院淨信信士

當壬戌歳まで百八ヶ歳に成る。

右周助事三枚帆より五枚帆所持して鹿児島往来致し候処、御下代昔し先年者板木取扱運送致したる

こと露顕におよび御城下表へ御用に罷りのほり候所、程なく御暇を下し云々

妻 天明七年丁未七月二十日

法名 祐善院妙信信女

當壬戌歳迄七十六歳(年)に成る。

右者、向江村長次郎方より来る。

嫡女 向江村政次郎孫

嫡子 兼七

娘 兼七 當村辻甚右衛門妻女に成る。伴辻長右衛門

二男 茂平次 天保五年甲午二月十九日

法名 靜春宗善信士

右者上里へ別宅妻は森藏妹也

三代

○計屋兼七

寛政八年辰七月廿八日病死

法名 淨屋院宗貞信士

當壬戌歳迄六十七歳(年)に成る。

妻 安永三年甲午正月十七日

法名 貞屋妙吟信女

右者平田兵藏娘於さんと云う

兵藏は今の市次郎祖父也。

後妻 新町の善五郎方より来り

法名 妙達信女

嫡子 周藏

二男 兵吉

右者平田彌助の所へ養子に行く。今の(當分)平田佐太郎先祖也。

三男 佐吉 此上隣旧別宅

妻者今の(當分)休兵衛の叔母 右嫡子 兼助

妻者先の新五郎娘

兼助嫡子 助次郎

嘉永七年寅二月十三日

法名 蓮花宗春信士

同娘 きよ

娘 袈裟女

小倉新八二男新五郎妻と成る。

計屋佐吉 天保六年乙未三月十一日

法名 春冬宗就信士

當壬戌歳迄二十七ヶ年に成る。

妻 長菊 弘化二年乙巳九月二十日

法名 詠月妙項信女

當壬戌歳迄十八ヶ歳に成る。

右者休兵衛方より来る。

嫡子 兼助 天保六年乙未三月七日

法名 春山宗砲信士

當壬戌歳迄二十七歳に成る。

兼助妻 天保六年乙未二月二十七日

法名 妙砲信女

右者、小倉新五郎方より来る。

當壬戌歳迄二十八歳に成る。

嘉永三年庚戌九月二十九日

兼助娘 きよ

法名 秋月妙渚信女

當壬戌歳迄十三歳に成る。

兼助嫡子助次郎 嘉永七年寅二月十三日

法名 蓮花宗春信士

當壬戌歳迄九ヶ歳に成る。

右兩人の子供者、為右衛門子分として生い立ち候所、終に若死に致し候事。右佐吉家之儀者、天保六年乙未正月脇元村へ痲瘡流行の初當三村（叶・脇元・新町）共に大騒動に及び、叶村の濱、銘々家を逃れ、作場（注・開墾地のこと）へ直り（移り）候所。同人娘 きよ 嘉永三年庚戌九月二十九日

法名 秋月渚信女

當壬戌迄十三歳に成る。

二月十三日佐吉孫きよ事、病に付き其の後、助次郎病に付き、御介抱として祖母長きく、越『平瀬の上』にて右三人は『住をきり候（注・そこへ住んだつきり）親佐吉并に悻兼助、同人妻（の三人）は相果て候。濱の畑、并に田は佐吉持留也。右瘡介抱人飯料等の儀は、當方より出し候所、日數過分に相成り、残りの儀は當清蔵より請平木にて上納致し、介抱賃分等の儀は、過分に相及び漸く相拂い候。

四代

○計屋周蔵

明和八年辛卯四月誕生

文政十一年戌子八月二十七日死去

法名 法性院宗種忠信士

右者當邑庄屋辨指相務候

當壬戌（文久二年）歳迄三十五歳に成る。

妻 辻甚右衛門娘 若死

寛政九年巳十月二十日

法名 妙隆信女

當壬戌歳迄六十八歳に成る。

後妻 永野藤吉娘

天明二年壬寅八月誕生

俗名於兼女嘉永六年 死去

法名 周月妙春信女

嫡子 周次郎（為右工門こと）

嫡女 犬袈裟 辻友助妻と成る。

安政三年丙辰七月十一日

法名 蓮月院妙夏信女

二男 助松

小倉喜佐太養子と成る。

三女 塩

小倉鉄五郎妻と成る。

三男 助左衛門

田中七軒邑へ別宅

四女 登女

右茂平次の跡を次ぐ。渡辺虎太郎妻と成る。

周次郎改名

五代

○計屋為右衛門

文化元年甲子七月八日誕生

法名 釋淨爲

（注・この時分より法華宗より浄土真宗に改宗せるもの如し）

明治三年庚午十二月二十三日

病没行年六十七歳

右者天性賢明にして、常に公共の事に奔走し、拾八歳にて横目役相勤め、其の後、式拾八歳にて庄屋相勤め、又幼少の頃より荷形船十六反、五枚帆、鯉船等を所持し鹿兒島往來をなす。本系図原本は、右為右衛門の作成したるもの也。

妻 辻長右衛門の娘

法名 釋尼妙順

俗名於さゝ 明治元年己巳旧七月十一日病没

逝年六拾歳

右者天性剛氣にして、刃物三昧の喧嘩にも男などの居るも留女となりて仲裁すれば、如何なる喧嘩も止み申し候、又鯉船を仕立て、子を背ひて『網とり』に行くを常とし、鯉船を一人にて川口を出したることも御座候

嫡子 淺右衛門 初名周吉

二男 平吉 天保二年寅十二月十六日誕生

永野藤吉悻藤四郎所へ養子と成る。

嫡女 龜松 有馬與八妻と成る。

安政二年乙卯七月十一日病没逝年二十

二歳

字名を松女という。法名 貞屋妙蓮信女

二女 婦佐 辻友助方へ爲養置所

藤山仙太郎妻と成る。

三女 於鶴

向江邑渡辺早助妻と成る。

三男 拓之進

渡辺友吉所養子と成る。改名し長兵衛と號す。

天保十年亥十月十日誕生

四女 雪女

渡辺助之丞妻と成る。

五女 菊女

計屋友次郎妻と成る。

○計屋淺右衛門

文政十一年子四月二十三日誕生

法名 釋教信

明治八年乙亥三月二十九日病没

妻 けさ

天保二年寅四月十八日誕生

牧甚藤次娘来る。

嫡女 於花 嘉永四年亥十二月二十二日誕生

田中邑、計屋助左衛門二男徳右衛門妻と成る。

嫡子 兼七 安政元年壬寅七月二十二日誕生

(謙蔵と改む)

二女 於せい 安政三年己の辰十一月五日誕生

永野兼吉所へ養子と成りし惣吉妻と成る。

三女 おさん 安政七年かのへ申三月八日誕生

渡辺長一妻と成る。

四女 おみつ 文久三年癸亥二月十二日誕生

渡辺助之丞所へ養子と成りし弁太郎妻と成る。

五女 おとみ 慶應元年午十一月五日誕生

牧萬右衛門妻と成る。

六女 おさゑ

二男 太吉 明治四年未十月五日誕生

右謙蔵所へ養子と成る。

七代

○計屋謙蔵

妻 安政三年己の辰正月十七日誕生

計屋助左衛門三女たん

嫡女 たに 明治十五年十二月二十六日誕生

右向江柴七兵衛二男七之助を婿養子と成す。此の七之助儀は、杉木植付其の他家

事上一切に付き非常なる熱心家にて計屋

家の爲功勞甚だ多し

嫡女 きくゑ 明治三十四年十二月二十日誕生

柴田芳江に嫁す。

嫡子 柴道好 明治三十六年二月五日誕生

二男 //伊平 明治三十九年九月六日誕生

三男 //繁彦 明治四十一年七月七日誕生

四男 //修蔵 明治四十五年四月一日誕生

五男 //賢六 東京八王子小池家に養子縁組、

現在(昭和四十二年七月)警

視庁警視在職

二女 //ふじ 現在(昭和四十二年)川崎市

在住、園田家に嫁す。

二女 やゑ 明治二十年旧十二月二日誕生

三女 きた 明治二十五年九月二十九日誕生

嫡子 謙吉 明治二十七年三月五日誕生

法名 釋好範信士

明治三十七年旧四月九日病没行年十一歳

四女 ける 明治二十八年七月二十八日誕生

二男 泰二 明治三十年旧五月十二日誕生

三男 太一郎 明治三十一年三月二十四日誕生

四男 慶蔵 明治三十四年七月二日誕生

八代

○計屋太吉

右太吉事實子なかりし爲、先代謙蔵の二男泰二を養子と成す。

妻 おいま 明治 年 誕生

牧新蔵の娘

九代

○計屋泰二

妻 シエ 字名(於シエ)

嫡子 謙吉

十代

○計屋謙吉

妻

本系図作成者要覧

一文久二年系図原本改書人 五代目計屋爲右エ門

一大正二年四月 " " 柴田勝惣

(柴田芳江の兄)

一昭和五十三年五月 " " 日高義弘

小倉助松四代の孫に当る
渡辺於鶴三代の孫

